

2番目の番とどうぞお幸せに

聖女は竜人に溺愛される

.....◆◆◆.....

クロム

リヒトが紬につけてくれた
幼い竜人。

.....◆◆◆.....

.....◆◆◆.....

アイラ

紬が会ったワニの獣人。
豪快な「お姉さん」。

.....◆◆◆.....

.....◆◆◆.....

レイス

異世界召喚後の紬を
診察してくれた医師。
ユリウスの2番目の番!?

.....◆◆◆.....

.....◆◆◆.....

ユリウス

紬の「番」だと言う狼の獣人。
紬を大切にすると誓ったが――

.....◆◆◆.....

.....◆◆◆.....

紬

突然、異世界に召喚されてしまった
天涯孤独の元女子大生。
「聖女」の力を持っていると
言われたものの、その力を使えない。

.....◆◆◆.....

.....◆◆◆.....

リヒト

ひょんなことから紬が会った
風変わりなお兄さん。
紬が作る料理が大好きで、
彼女を優しく守ってくれる。

.....◆◆◆.....

登場人物紹介

異世界

目を開いた時には、もう知らない場所にいた。
石造りの広い部屋に知らない顔の人達。

「人間のおなか！ 四百年ぶりの聖女が！ この魔法陣は女神アフネスの祝福!! 誰の番じゃ!!
すぐに触れを出せ!!」

お話の中みたいな王冠を被ったおじさんが興奮して叫んでいる。

女神アフネス？ 聞いたことがない。

頭がぼんやりするせいで、夢なのか現実なのかよく分からない。

「その必要はありません。彼女は……私の番です。検めても？」

「ユリウス！ お前か！ ヴィクトラン家か……势力的にも均衡が守られるな。良い、疾く検
めよ」

ユリウスと呼ばれた銀髪の男の人が私の前に跪き、澄んだブルーの瞳で覗きこむ。

恐ろしく綺麗な人で、頭に三角の耳がある。髪色と同じシルバーの耳はふわふわとしていて本物
にしか見えないし、騎士の格好がとてもよく似合っている。

「番の匂いとは……こうも甘いものなのですね……理性が……焼き切れそうだ。失礼、お名前を伺っても？」

「つむぎ……です。玲林^{れいりんつむぎ}紬」

「紬、私はユリウス・ヴィクトラン。狼の獣人だよ。獣人を見たことは？」

私が首を横に振ると、彼はにっこり笑って手を取り指先に口付けた。

「怯^{おび}えないで。大丈夫、私が守るよ。紬、左半身で何か変わったことはない？」

「左……？」

「そう、君の左半身のどこかに痣^{あざ}が出ているはずなんだ。女神アフネスの祝福を受けているはず」

「あ……？ 手……？ 左手が、熱い……」

「見せてもらっても？」

「？ はい……」

左手首の内側をおずおずと見せる。そこには薔薇^{ばら}の花の形の赤い痣が浮かんでいた。

「既に匂いで確信しておりますが、ヴィクトラン家の象徴^{しやうてい}華^かを確認いたしました。間違いありません」

ユリウスと名乗った銀髪の男の人が痣にキスを落とし、ふわっと私を抱き上げた。

頭がズキズキして気持ち悪い。

「四百年ぶりの聖女、ヴィクトランの名の下^{もと}にお守りせよ」

耳鳴りの向こうで声がする。



「御意に。御前失礼します。番を休ませてやりたい」

王冠を被った王様らしい人に一礼し、彼はザワザワとする騒がしい部屋を出たようだったけれど、気を失った私はもう何も分からなかった。

「――起きた？　気分はどう？　あなた、召喚の儀の後に倒れたのよ」

次に気が付いた場所は、同じ建物内の医務室のようなところだった。白衣を着た金髪の美しい女性が心配そうに覗きこんでくる。

この人も頭に金色の耳がある。後ろにはふさふさの尻尾。

「つ……はい。もう大丈夫です。ここは？」

「ここは王城の救護室よ。ユリウス様に伝言を送ったから、もうすぐ大慌てで迎えに来るはず。その前に、検査して身だしなみをととのえないとね？」

胸のプレートには「国家薬師レイス・マリージョア」と書かれている。お医者さんなんだろうか。ぼんやりしているうちに彼女は手早く採血を終わらせて、私の長いストレートの髪をブラシで丁寧にといてくれた。

「綺麗な黒髪ね。私があなたの主治医になったから、困ったことがあったらすぐに言つてね、ツムギ」

「はい、えつと……」

「レイス・マリージョアよ。こんな仕事をしているけれど一応、公爵家の長女なの。よろしくね」

「はい、レイス様よろしくお願いします」

その後は苦笑してしまうほど慌てた様子のユリウス様が転がりこんできて、私を抱きしめ、おでこにキスを贈り、攫うように王城を後にした。



王城近くの大きなお邸やしきに到着し、西洋風の豪華なお部屋に通される。

けれどやっぱりまだ頭がぼんやりしたままで、怖いとか不安とかいった感覚からは遠い気がした。あり得ない状況の只中ただなかにいるはずなのに、傍観者みたいな気持ちになる。自分を斜め上から見下ろしているような。

「ごめんね、急に攫うような真似をして。あれ以上、他の男達の目に君を映したくなかったんだ」「いえ……右も左も分からない私に親切にしてくださいありがとうございます。すいません、なんだか、ぼんやりしてしまって……」

「加護がかかっているんだよ。異世界からの転移に動揺しないようにね。じきに治るから安心していいよ」

私は召喚されたと言われた。

獣人なんて地球にいるわけがないし、違う世界に強制的に飛ばされたということだろう。

「それに君を守るのは当然だ。君は私の番なんだよ、紬。紬は人間だから分からないかもしれない

けれど……私は番の甘い匂いで冷静でいられない」

「その……番っていうのは……？」

「私達、獣人にとって唯一無二の伴侶のことだよ」

「ここは獣人の国なんですか？」

「そう。人族は私達と違って弱いからもう数が少なくて……最近は見ないね」

お仲間はあまりいないのか。

どうせ向こうの世界でも一人だったから変わらないかもしれない。

大学二年で両親が自損事故で亡くなり、後期の学費に窮した。奨学金を考えたものの、どうせいつか働くならと思い切って退学手続きをした日にこんなことになった。踏んだり蹴ったりだ。

「私はこれからどうなるんですか？」

「私の番としてここでゆっくり生活したらいいよ。聖女としてのお勤めはもっと落ち着いてからにしようね。まずは私との時間が大切だから」

「あ、はい。よろしく、お願いします？ 聖女？」

またお話の中の単語が出てくる。

私はただの人間で聖女でなんてあるはずがないのに。現に、なんの力も感じない。

「うん、異界を超えた人間には神より加護が与えられる。歴代の聖女達もみんな治癒の力があつたよ」

「そんな力は……」

「今はまだ混乱しているだけだよ。文字は分かるかな？ 言葉は通じているから、文字も分かると思うんだけど……契約書にサインをしてほしい。私の番として国に認めてもらおうね？」

契約書？ 婚姻届などの届けではなく？

チラと書面を見ると、知っているどの言語とも違った文字なのに脳内で変換されるのか、読むことができた。甲乙と記された文章がその書類の重要度を物語っているようだ。内容が分かってもこの国の常識を知らない私がホイホイとサインしていいものではないことくらいは判断できる。

「あ、文字は、読めなくて……ごめんなさい」

咄嗟に嘘で誤魔化す。

ユリウスさん——ユリウス様（？）は綺麗で王子様みたいなイケメンだと思うけれど、いきなりよく分からない契約はできないもんね。

「そう……残念だけど急かしたいわけじゃないからゆっくりやろう。まずは名前を書けるようにしないかね。落ち着いたら、家庭教師をつけてあげる」

「はい……ありがとうございます」

「まずはゆっくり休もうね」

一週間の休みを取ったという彼が、朝から両手にプレゼントを持って私に与えられた部屋に来了。あの、こんなには……」

紙袋数点に、花束もある。

「遠慮しないで。獣人の雄はプレゼントで愛情表現をするんだ。その代わり、他の男からのプレゼントは貰^{もら}ってはいけないよ。愛情を受け入れたことになってしまうから」

「それは……はい」

ユリウス様は近衛騎士団に所属^{このえ}していて王城勤めだそうで、これまでは王城の寮に寝泊まりしていたらしい。

私が来たことで急遽^{きゅうきょ}、邸を整えているのか、館内が騒がしい。

「侯爵様、お茶をお持ちいたしました」

「ああ、ありがとう。紬、紹介するよ。君の専属メイドのラクラだ。ここはラクラと数人のメイドしか置いていなかったからね、これから執事や侍女を手配して紬が住みやすいようにしようね」

紹介されたラクラさんは、大柄の優しそうな顔をした中年女性で、茶色の耳をしている。

「紬・玲林と申します。お世話になります」

「なんなりとお申し付けくださいまし」

彼女はニコツと笑って退出した。付き合にくい人ではないようで安心する。

「ドレスは工房を呼んでオーダーしよう。今日はシンプルな街歩き用しか買ってこられなかったから……今度、一部屋潰してクローゼットを作ろう」

「そんなには……」

ユリウス様が私にとでも良くしてくれているのが分かって、恐縮する。

おかげで、急に知らない場所でサバイバルする事態にならなくて本当に良かったと思う。

「ユ、ユリウス様は本当に私の番なんですか？」

「ん？ 紬には分からないよね。今も紬から甘い匂いがあるよ。番の私にしか分からない。それにヴィクトラン家の象徴華の痣も浮かんでいる。番なんてそうそう見つかるものではないから、私は幸せ者だね」

「この痣、ですか？」

左手首に現れた薔薇の形の痣は、いまだに中心部分がほんのり温かい。

「そう。各家に象徴華があつてね、人間の女の子と番になると、その子に痣が現れるんだよ。人間は番の匂いが分からないから、印^{しるし}が現れるように神が采配したのだろうね」

「獣人の女の子には、痣はないんですか？」

「うん、ないよ。お互い匂いですぐに分かるから必要ないしね。心配しなくても正真正銘、紬は私の番だよ」

ユリウス様はそう言って、私の髪先を持ち上げてキスを落とした。

とてもキザな仕草だけれど、彼がやると様になるから不思議だ。銀の髪が揺れて、澄んだブルーグレーの瞳が私を覗きこむ。

「今は色々と不安だろう？ けれど早急に私と番ってもらいたい。紬が初めてなのは匂いで分かるのだけれど……獣の性が抑えきれそうにない……君の匂いに、酔いそうだ……」

「それは、どういう………？」

その時、リンツとベルの鳴るような高い音がした。

直後にユリウス様がポケットから銀の飾りのついたガラスの試験管のようなものを取り出す。中には古びた細長い紙が入っていて、そこに青白く光る文字が浮かんでいる。

“急ぎ王城に來られたし”

あまり長い文は入りきらないのか、簡潔な文章が読み取れた。

文字は読めないと云った手前、黙っていると、銀の耳をクツタリと下げた彼が跪いて私の目を覗きこむ。

「急ぎの仕事が入ったみたい。ちよつと行ってくるね、すぐ戻ってくるよ」
そう言い残して名残惜しそうに何度も振り返りながら部屋を出ていった。
シャワーを浴びて、プレゼントされたシンプルなワンピースに着替える。
そこでどつと疲れが出たのか、そのまま眠ってしまった。

——結局その日、ユリウス様は帰ってはこなかった。

翌日の朝食の席に現れたユリウス様は、何故かひどく疲れた顔をしていた。食欲もあまりないみたいだ。

「お仕事、大丈夫でしたか？」

「ん？ ああ、うん、ちよつと想定外なことが起きてね……。私は……私は君に誠実でありたい。少し、話しても？」

「？ ええ」

王子様みたいな綺麗な顔が青白い。彼は今にも倒れそうなのに、それでも私に気を遣ってくれている。

「昨日、私にもう一人の番が現れた。本人が番かもしれないと申し出てきたんだ。彼女はこの国の者で、昨日、急に番の匂いが分かったと言っていた。急に分かるようになるなんて、そんな話は聞いたことないのだけれど、確かに彼女から番の匂いをうつすら感じたんだ」

「……………」

私以外にユリウス様の番がいたということ？

「そもそも番が見つかるなんてそうそうないし、神の祝福だから分からないことも多い。二人も現れるなんて前代未聞だけれど、ラディアン神の采配なのだと結論付けられた」

「はい」

話の結末が見えない。私はどうなってしまうのだろうか？

「けれど紬から感じるほどの強い番のフェロモンは感じない。だから正直にそう彼女に話した」

「はい」

「彼女は——彼女は身を引くと言ってくれたんだ。同じ獣人の彼女が、番の私を諦めると」
なんだかいたたまれない気持ちになる。どうしたらいいのかわからない。前にも後ろにも動けない感覚で、心臓がバクバクと煩い。

「私は紬の番だ。それは変わらない。けれど同じ獣人として彼女に申し訳ない気持ちもあつて……」
ユリウス様はそこで一旦言葉を切り、私から目を逸らしてこう言った。

「辛い選択をさせてしまった彼女の、最後の願いを叶えてやりたい。彼女は、私との思い出が欲しいそうだ」

「思い出……」

「ああ。ただ会って話すだけだ。話をしたり、出かけたりするだけ。それが終われば、私は紬のもとに必ず帰るよ。私の番は君だけだ」

「えっと……はい……」

しゅんと垂れた耳と尻尾から、彼が心底困っていることが分かる。

私に選択肢などない。

異世界に召喚されて、右も左も分らないのだから。

保護者のようなユリウス様の選択に、異を唱えられるはずがなかった。



国立公園、噴水前のベンチ——特等席で見られる、あの人の浮気現場。

私のいる国立公園から大きな通りを挟んで向かいに建つ、おしゃれなホテルの二階にあるカフェのテラス。

そこに座るユリウス様の後ろ姿と、その向かいのレイス様の笑顔。

時折チラとこちらを見るレイス様は本当に儂^{はかな}げに笑う。

意地悪な顔ではなく、とても嬉しそうに。

……わざと私に見せているくせに。

「はあ、帰ろ……」

侯爵邸から徒歩で二十分ほどの距離にある国立公園のベンチでひとりごちる。

「帰っても、なあ……」

力の使えない聖女の肩身は狭い。

ユリウス様は私を聖女だと言い切っていたけれど、力が使えたことはない。

召喚は国家規模の魔力を必要とするようで頻繁には行えないし、成功率もすごく低い。せつかく数百年ぶりに成功して現れた私が力を使えないので、お偉いさん達は落胆しているそうだ。

戦争の最強のカードとして使いたかったのに、出てきたのは弱い人間の聖女もどき。

片や相手は国家薬師のエリート公爵令嬢。ユリウス様のご家族も家人もみんな、彼女を番に迎えないに違いない。公爵令嬢との結婚はユリウス様にとって出世の道だもの。

一度目に彼らを見たのは、本当に偶然だった。

ユリウス様の笛文^{ふえかみ}（試験管の形の通信用魔法具らしい）に書かれた文字が見えてしまったのだ。

いつもの場所で、待ってる。レイ“

そんなメッセージを受け取ったユリウス様は、慌てて席を立った。

「急な仕事が入ったみたい。また来週来るから待っていて？」

「お仕事……」

「そうなんだ。困っちゃうね、番との大切な時間だっていうのに」

彼はちゃんと困り顔だ。

口にした言葉とチグハグなのは、メッセージだけ。

私が文字を読めるなんて思っていないユリウス様は、笛文のメッセージを隠そうともしない。

ガラスの試験管の中の古びた紙に、甘いメッセージ。

気持ちの置きどころがなくて勝手に外に出てフラフラと歩き回っていた私は、例のカフェで楽しそうにデートする二人を見つけた。

レイス様と目が合った時、彼女は一瞬ビックリした顔をした。けれど、すぐになつこり綺麗な笑顔になった。

いつもの場所、二人の特別な場所を知ってしまった。

それから、ユリウス様が急な仕事だと言った時はここに来る癖がついてしまった。

わざわざ確認しなくても頭では分かっているのにモヤモヤが晴れず、散歩と称してここを訪れる。

——二人目の番。

ユリウス様の一人目の番は、私だ。

そして、二人目の番は私の担当医師だったレイス様。

ユリウス様は私に話を通してレイス様の最後のお願いを叶えているのだ。
いつまで続くのかは誰も知らない。

ユリウス様は毎週月曜日から金曜日までは王城でレイス様と過ごす。土日は私のいる侯爵邸に必ず帰ってくる。

帰ってはくるけれど、私と話す間もなく仕事だと呼び出されては出かけていく。

レイス様に呼び出されて。

私には仕事だと言って。

いそいそと出かける彼は口では辛そうだけれど、どこか嬉しそうだ。

土日は私との時間と一応は決めているらしく、律儀に一度は帰ってくる。けれど、すぐにレイス様に呼ばれて出ていく。——まだがルーティンだ。

本人は帰ってくることで義理を果たした気になっているんだと思う。

侯爵邸の門を潜り、自室に戻る前に食堂に寄った。

いまだに使用人の数が少ない侯爵邸は、メイド達がセルフサービスでご飯を食べられるように、ご飯時の食堂にはbuffetスタイルでパンとスープと簡単なおかず一品が用意される。

ユリウス様がいる時はちゃんと私の食事を作ってくれるけれど、いない時は作られないので、いつもここまで食べに来なければならぬ。

食事には遅い時間なので食堂にはもうパンとスープしか残っていなかったけれど、いつものことなので手早く済ませる。

そこにメイド長のラクラさんがやってきて、あからさまに不機嫌な声を出した。

「片付かないんで、早く食べてもらえますかね？」

「ええ、ごめんなさい」

「終わったら、聖女の力の練習でもしたらどうです？」

クスクスと扉のほうから笑い声がする。見やると、侯爵邸で働くメイドが二人、意地悪そうに笑っていた。

「……そうします」

簡単に食器を片付けた私は、逃げるように自室に戻った。

目をギュッとつぶって、モヤモヤした気持ちを追い出す。

この生活が始まった二ヶ月前は、何をしたら良いか分からず、ただ厄介者^{やっかい}となっているだけの自分に泣いてばかりいた。

けれどそれも、初めてレイス様の私を嘲^{あざけ}る笑顔を見た時に吹っ切れた。

なのに休日は毎回、カフェを見に行ってしまう自分が嫌いだ。

その日は珍しく一度、侯爵邸に帰ってきたユリウス様が言った。

「今日は本当にごめんね。まだ仕事が終わらなくて、また行かなくっちゃいけないんだけど、来週の花祭りは一緒に行こうか。楽しみにしていて」

「ありがとうございます……花祭り？」

「街中花でいっぱいになるよ、豊穡^{ほうじやく}祈願のお祭りなんだ。街歩き用のドレスを贈るね。そんな顔しないで、私の番。レイスのこと、気に病^やんでいるの？ 大丈夫だよ。少し待てば、私は君のもとに戻るんだから」

「……そう………ですね……」

「君に似合う花を考えておくよ。花祭りは恋人達の祭りでもあるし、番との初デートにピッタリだよ」

「ええ……」

その時またリンと高い鈴の音がして、笛文にメッセージが届く。それをチラと見たユリウス様は、「仕事だ」と言ってまた去っていった。

仕事だったことは、一度もないのだけれど。

堂々と可哀想な二番目の番の願いを叶えると言いながら、彼は細かなところで嘘をつく。

どちらにも誠実で優しくあろうとする。

「花祭りか………別にあんまり行きたくはないなあ」

一週間はあつという間に過ぎて、花祭りの日が来た。

因みに、街歩き用のドレスを贈ると言っていたユリウス様からは何も贈られていない。

召喚された日に急遽、用意してもらった三着のワンピースをローションで着ている私は、今日もそこから選ぶ。

何かを贈るという約束が果たされたことはないの、落胆はない。

平日があまりにも楽しくて、きつとユリウス様は忘れてしまうのだろう。

その彼が昼過ぎにやってきて、今、青い顔で私に向き合っている。

お茶をしてから街に出かけてお祭りを楽しもうと、彼は私に真つ赤な薔薇の花を一本くれた。恋人や夫婦は女性の髪と男性の上衣のポケットに同じ花を飾ってお祭りを楽しむのが主流らしく、ユリウス様のポケットには既に赤い薔薇が飾られている。

「いつもの場所です。待っています。レイ」

メッセーじはすぐに消えて、また新しいメッセーじが来た。

「今年の花祭りの思い出だけ、私にください」

ユリウス様はメッセーじから目を離さないように、自分が悲痛な表情になっていることにまでは気が回っていない。

「近衛騎士様のお仕事は、大変なんですね。私なら大丈夫ですで行ってください。お祭りなら来、年もありますし」

「あ、ああ、そうだな。来年も再来年もずっと君は行けるんだ。今年は仕事が入って………。すまない。行ってくる」

「はい、行ってらっしゃいませ。お見送りをして吗？」

普段、見送りなんてしたことはない。だって、彼はいいそと素早く出ていくし。

ユリウス様は戸惑いながらも私をエスコートして正門まで行くと、馬に乗って去っていった。一度も振り返らずに。馬に乗りながら振り返るのかどうかは知らないけれど。

「仕事だつて言うなら、近衛騎士の隊服に着替えてから行くぐらの気は回してよね」

今日こうなることは、うすうす予想していた。

もう全てがどうでも良くなって、自分が何故ここにいるのかが分からなくなる。

「そつか、私、別にここにいらなくてもいいのか」

ひとりごちて、そのまま歩き出す。

街に行くくと二人のデートに遭遇するかもしれないので、逆方向へ。

とぼとぼ歩いている途中、街への牛乳配達からの帰りだという狼獣人に運良く荷馬車に乗せてもらうことができた。

どこへ行つたらいいかも分からないけれど、とりあえず侯爵邸じゃなければなんでもいい。心がどんどん晴れ晴れとしてきている。

二時間ほど馬車に揺られて着いた田舎町で降りてもらい、狼獣人の彼にお礼を言つて別れた。

小さな町を見て回る。

久しぶりに自由で、晴れやかで、楽しい。

パン屋さんに果物と野菜のお店、古着屋もあつて、のどかな雰囲気がある町だ。

小さなアクセサリーショップがあつたので、そこでユリウス様から初日に頂いたルビーの指輪を売つてお金に換えた。これで少しは生きていけるはず。

万が一お祭りを見て歩くことになった時に少しは華やかにしたいとつけておいて良かった。宿屋が見つからなかつたので、まずは腹ごしらえをしようとパン屋さんのドアを潜る。

ドアは開いていたのに、中にパンが全く置かれていない。カウンターで店員らしき人と誰かが揉めている。

「お願いします！　お願いします!!　わざわざあなたを王都から呼んだのです!!　必ずお支払いいたしますから！　何年かかっても必ず!!」

「〜ですから!!　分割は受け付けないと言っているではないですか！　払えないと分かっている者に高価な薬を出せるわけじゃないでしょう!!」

お店の人らしいエプロンをした女性が、泣きながら白衣の男性に懇願している。

「このままではあの子が!!　お願いします！　どうか、どうかこの通りです!!」

「何を言われても支払いができない者に薬は出せません。金貨五枚、キツチリご用意ください」

「そんな……」

女性がその場にヘナヘナと座りこむ。悲痛なその顔には涙が溢れていた。

例の指輪の代金、金貨五枚だったな……とぼんやり考えた時には、既に声をかけていた。どうせあぶく銭だし。パーッと行こう。

「私が払います。お薬代ですよね？　これを」

そう言つて、金貨五枚をカウンターに置いた。女の人が啞然とした顔で私を振り返る。

医者らしき白衣のおじさんはカウンターと私を見比べた後、金貨をしまい、カバンを持って無言で店の二階に上がっていった。

「お子さんですか？　二階にいるのでしょうか？」

「はい、なんと、なんとお礼を言ったらいいか……」

女性が震える声で答える。

「私も様子を見に行つても良いでしょうか？」

私の言葉に弾かれたように顔を上げ、彼女はすごい勢いで階段を上っていった。

私も勝手に上がらせてもらう。

向かった部屋では、栗色の髪と耳をした可愛らしい狼獣人の女の子が小さなベッドで眠っていた。先ほどの白衣のおじさんが彼女に注射を打っている。

「魔力抗生物質を注射しました。これですぐに良くなるはず、私の診療はここまでです。あとは町医者に引き継いでも問題ありません。では帰らせていただく」

何故か私に説明をして、彼は開いたドアから出ていった。

「ああ、ああ……!!　マリセラ！　良かった……!!　よか、良かった……!!」

もう大丈夫そうだ。

邪魔をしては悪いかなど思いドアのほうに向かおうとした私は、そこで腕を掴まれた。

「名乗りもせず、申し訳ありません。私はヒルデ、この子はマリセラと申します」

「つむぎと申します。マリセラちゃん、良かったですね」

もう良くなるとあの医者が言っていた。なんの病気かは知らないけれど。

「ツムギ様のおかげでございます！　このご恩は決して！」

「あの、様はやめてもらつても……？　敬語も必要ありません。どうせ、要らないものを売ったあ

ぶく銭でしたから」

「…………ツムギ、おねえちゃん？ あ、ありがとう、私、治るの？」

小さなベッドから声がして、まん丸な緑の瞳と目が合う。

十歳くらいだろうか、可愛らしい栗色の三角耳。

「そうだよ。沢山食べて、お母さんを安心させてあげようね」

「ママ、ママ！ 痛くない、体、痛くないよ！」

元気な声にヒルデさんがベッドにかけより、声を殺して泣く。

「では、私はこれで」

「お待ちくだ……待って！ ツムギちゃんにお礼を！ この町の人じゃないでしょう!? この町には宿がないから、もしまだこの町にいるのなら泊まっていて！」

その言葉に、私は思わず振り返る。

「わあ、ありがたいです！ 実は行くあてがなくて」

あぶく銭はなくなったけど、今夜の宿を手に入れたぞ！

ヒルデさんのうちに泊めてもらって四日になる。

マリセラちゃんはぐんぐん良くなって、今や部屋中を走り回っているほどだ。

「怪我したところばい菌が入ったんだって。全身すっごく痛かったのに、もうなんともないよ！」

「ふふふ、良かったねえ。私も元気を出して、住む場所と仕事を探さなくちゃ！」

「ツムギちゃんは旅の人じゃなくて移住者だったの!? それなら早く言ってくれたら良かったのに！」

ヒルデさんが大きな声を出して、私の肩をゆする。

あの後。彼女は荷物すら持っていない完全に訳ありな私に、一切事情を聞かなくてくれた。

痣は包帯で隠してあるから、私が誰かの番ということはバレてはいない。

ヒルデさんは、私が自分から事情を話すのを待っていてくれるんだと思う。獣人にも優しい人がいることに、安堵と嬉しさが込み上げる。

「いい物件のあてがありますか？ でももうお金がなくて。まずは住みこみの職場を探そうかと」

「すぐ裏の森に私の実家があるの。今はもう使っていないから、そこに住めばいいわ!! ここ狼獣人の国ラディアンと隣国が数年取り合っていた山なのよ。今は中立国が介入しているから安全だし、この町からも近いし！」

「わあ！ ほんとですか！ ありがたいです！ 何から何までお世話になって……」

「娘の命の恩人よ！ そのくらいじゃ足りないわ！ 今から行ってみましょう。絶対、気に入ると思っの!!」

そう言っ、ヒルデさんは私の手を取りずんと外に出た。

途中、生活用品と食材を買い、町の外れの道を進む。

二十分程度で拓けた土地と湖が見えてきた。脇にクリーム色の壁の小さな可愛らしい家が建っている。納屋と馬小屋らしきものであった。

「ね？ 近いでしょ？ どうかしら!？」

「素敵すぎです!!」

「うふふ、お掃除しちゃいましょう!」

二人でお喋りしながら大掃除をする。埃は溜まっていたものの、大切に使われていたらしく、すぐに片付いた。

水も出るしコンロになる熱源の石もあって、生活には困らなそう。あかりは魔法具らしいランタンと蝋燭の併用だ。

「ツムギちゃん、あの子の治療費としてかき集めたお金、すごくごく少なくてまだまだ全然足りないんだけど、受け取ってくれる?」

そう言ってヒルデさんが私に握らせたのは、銅貨が詰まった小さな革袋だった。

「いりません。お金なんか返さなくて大丈夫。縁を切りたい人から貰ったものをお金に換えただけだったから。私のほうこそ、こんなに素敵なおうちを貸してただけて……」

彼女はにつこり笑った後に私の手を取り、まっすぐに見つめてきた。

「仕事を探すまでの生活費になると思うから、貰ってほしい。それに、うちの店のパンは永久に食べ放題よ!!」

「ふふふふ、じゃあお言葉に甘えて! ヒルデさん、ありがとう!!」

邂逅

マリセラちゃんを心配して帰るヒルデさんを途中まで見送った後、ちようどいい機会なので道を逸れ、家の周りに何かあるのか確認しつつ迷わないように注意しながら散歩することにした。

小さな小川を発見したり、レモンの木を見ついたり、冒険みたいですごく楽しい。

ちよつと離れすぎたかなと感じたところで、太陽の方角を確認して家に戻る。

途中、何かを打ち付けているみたいな音がすることに気が付いた。

誰かいるのかなと思つて音に近づき、息を呑む。

興奮した黒い大きな馬が右脚を木に打ち付けている。ガンツという音はこの音だった。

「お、落ちていて、どうしたの?」

すごく怖い。こんな大きな馬に一蹴りでもされたら大怪我では済まない。

動物園で見た馬よりも一回り大きい気がする。そのくらい圧のある体軀をしている。

「ま、前脚が、変な感じなの? 打ち付けたら、よ、余計にひどくなるよ……?」

よく見ると右の前脚が変な方向に曲がっている。骨折しているのだと分かつて、サーと血の気が引いた。

重い体重を支える脚が一本でも折れたら、もうこの子は死ぬしかない。

近くにこの子のものだったと思われる轍と手綱が落ちている。

「怪我をして、おいていかれちゃったの!? ちょっと待ってて! もう打ち付けないで!!」

走って家に帰ってバケツに水を汲み、ヒルデさんが買ってくれたニンジンとリンゴをひったくるようにして持つ。

馬が普段、何を食べるのなんて知らない。草を食べるイメージと、お話の中ではニンジンをよく食べているはず!

息を切らして戻ると、黒い馬は私の言葉が分かったのか大人しく木の下で待っていた。

幾分か興奮がおさまったようで木に寄りかかり三本の脚で拙く立っている。

どのくらいこの子は一人だったのだろう。怪我をして不安で、上手く動かない脚が不思議でイライラして、寂しくて。

考えただけで涙が出てくる。

「遅くなってごめんね、お水、ここに置くね?」

足元にバケツを置いてやると、黒馬はブルンとわなないて、こちらを見た。まんまるな藍色の瞳でじっと私を見つめる。

「……………? 首、下に曲げられない…………? そっか、前脚が折れてるもんね、ごめんなさい!」バケツを持って黒馬の顔に近づける。

黒馬はしばらくじっと私を見据えていたが、やがてペチャペチャと水を舐める音が聞こえた。上手に飲めているようでホッとする。

水を飲んだことで、より興奮がおさまったように思う。元々大人しい気質の子なのかもしれない。ニンジン差し出すと、チラとまた私を見た後すぐに口に入れた。リンゴも同じように食べさせる。

「よ、良かった、食欲はあったね。後でもう少し食べようね」

町の市場で買った野菜がまだ残っているはず。

恐る恐る頭を撫でてみると、気持ち良さそうに目を閉じてされるがままになっている。すごく可愛い。

「あ、あのね、私、癒しの魔法が使えるんじゃないかって言われて。い、一度もできたことないんだけど、が、頑張ってみてもいいかな?」

黒馬はじっと私を見る。そしてスリッと手のひらに顔を押し付けた。

「いいって、こと、かな?」

オロオロと尋ねると、今度は顔に直接スリスリと擦り寄られて、思わず声が出る。

「ふふ、可愛い。お返事してくれたの? 賢いね」

黒馬の頭を優しく抱きしめてお礼を言ってから、屈んで折れた脚に触れてみる。

さっきまで感じていた恐怖は既になく、プルプルと子鹿みたいに震える前脚に右手をかざす。

歴代の聖女は手をかざすだけだったと聞いているけれど、私はそれで力が発動したことはない。「うう…………やっぱり分からない…………どうしよう」

このまま治らなければ、この子は死んでしまうだろう。馬にとって脚の怪我はそれ程のものだ。

その時、黒馬が残る前脚を突っ張って、無理やり頭を下げた。私の肩に頭をつけ、スリスリと顔を撫でる。

「い、痛いでしょ!? 戻って!! つ慰めて……くれてるの?」
痛いのも辛いのもあなたなのに……

その時、右手に何か熱を感じ、再び前脚に触れる。直後、白金の光が黒馬と私を包んで、波のようなものが私から黒馬へ循環する感覚がした。

「何……これ……?」

高いいななきが聞こえ、また黒馬が私の顔にスリスリと擦り寄る。慌てて脚を見ると、黒馬はまっすぐに力強く立っていた。

「成……功した? す、凄^{すば}い、できた!」

いつもと何が違って、どうして今回は成功したのか分からない。けれど、すごく嬉しい!

それからすぐに空っぽの馬小屋を掃除して、黒馬が眠れるスペースを作った。普通の馬より体が大きいのでちよつと狭そうだけれど仕方がない。

賢い子なので体力が戻って元気になったら自分で飼い主のもとへ行くかなと思い、扉は開けておいた。

「これ、あなたのよね? 大切なものだろうから、ここに置いておくね?」

鞍と手綱を作業台の見えるところに載せてやると、黒馬はとても嬉しそうに鳴いた。

可愛がられていたんだなと分かる。

鞍、めつつちゃ重かった……

「好きに出ていいからね。ちよつと買い物に出かけてくるね」

黒馬はすぐに体を横たえウトウトとし始めたので、余程疲れていたのだろう。馬って、普段は立って寝ると聞いたことがあるし。

そつと町に出て買い物をする。

節約のために自炊しなくてはならないので、卵と干し肉、ナッツ、小麦粉と調味料、黒馬のためのフルーツと野菜もどつさり買い足した。

思い立って馬用のブラシも一つ買って、森に戻る。

小屋の前の小さな湖で黒馬が水浴びをしている姿を認めてニマニマとしてしまう。誰か待っていてくれる人がいるのは(たとえ人じゃなくても)とても嬉しい。

「ただいま! フルーツもお野菜も沢山買ってきたよ! 後で食べようね?」

ブルブルツと水を振るい落として私のもとに來た黒馬は、スリスリと擦り寄る。それがおかえりと言ってくれているようで、これも嬉しい。

「名前がないと不便だよ。もうついているんだろうけど、新しくつけてもいいかな?」

藍色の瞳が優しく私を見る。

「うーん、すつごく可愛いから、可愛い名前がいいなあ〜! テトはどう? 呼びやすいし、可愛い」

ぎゅうと抱きしめながら言う、またスリスリしてきた。気に入ってくれたのだろう。

「おいでテト、ブラシを買ってきたの！　せっかく綺麗にしたみたいだからブラッシングもしてあげるね！」

木陰に連れていくと、また四肢を折って横になる。その脇に座って丁寧にブラシをかけていく。馬ってこんなに横になるのかと不思議だ。やつぱり、かなり体力を消耗しているに違いない。

「わあ、ツヤツヤだねえ。とってもイケメンさん」

テトはずっと目を閉じて気持ち良さそうにしている。眠っているのかも。

優しくブラシをかけた毛並みが木漏れ日にキラキラと艶めく。

「もつと固い毛なのかと思ったら、柔らかくていい匂い……」

テトの背中におでこをつけると、速い心臓の鼓動とお日様の匂いを感じた。

ピューーウ。ピューーウ。

不意に甲高い音が聞こえた。

「ん……眠っちゃった……鳥の声？　口笛？」

再び、音が聞こえる。

「クイーンー！！」

急にテトが高く鳴き、その鳴き声に驚いて私は覚醒した。

「ど、どうしたの？　鳥が怖い？」

「クイーンー！！」

もう一度空に向かって鳴いた後、テトは突然、起き上がって湖のほうに駆けていった。

途中、一度私を振り返って止まる。ついてこいという意味かと予想して、慌てて後を追った。

午後の柔らかな日差しの作る木漏れ日が湖に反射して、テトの黒い毛が艶々と光る。

「わあ！　テト、キラキラしてきれいだねえ！　やつぱり、イケメンさん！」

テトはまたクイーンーと高く鳴くと、湖に入り近くの茂みをじつと見つめて止まった。

「どうしたの？　何か、いた？」

靴を脱いでそばに駆け寄る。浅瀬にいたテトは私の体に寄り添うように立ってくれて心強い。

「テルガード!!　お前、生きてたのか!？」

テトが視線を送っていた先から、ガサガサと黒い軍服を着た男の人が飛び出てきた。テトに寄り添う私を認めて紺色の目を見開く。

「……テトの、飼い主さんですか？」

少し、怖い。剣ではなく、大小の刀を差している。背も高いし体も大きい。切れ長の目の精悍な顔。

「!?　——天女!？」

怯えた私を宥めようとしてくれたのか、テトが頬にスリスリと鼻先を付ける。

「テルガードが……懐いている……？　天女殿が世話を？」

天女って……大真面目に変な言葉を口にする彼に一気に怖さが薄れ、私はテトの頭を撫でてやり

ながら答える。

「天女ではなく、ちゃんと人間ですよ。テトの怪我は治したのもう大丈夫です」

「治した……？ 人間!？」

黒髪の軍人さんは紺色の目を見開いて、私とテトの間で視線を行ったり来たりさせる。金色の瞳孔が紺色の目の中でキラキラと輝き美しい。

「ただ、まだ体力は戻り切っていないと思うのです。私は馬のことに詳しくはないんですけど、横になることが多いので……体力が戻るまで、もう少しここで面倒をみても良いでしょうか？」

「それは……願ってもないが……そばにいてやりたい。俺も、馬小屋でもどこでもいいから置いてくれれば有難い」

「ふふふ、テト、やっぱりあなた可愛がられていたのね？ もう一つお部屋があるので、お兄さんはそこにどうぞ。私も今日借りたばかりで、片付けを手伝っていただけたら嬉しいですよ」

「有難い。なんでもする、そちらに行っても？」

「ふふ、はい」

さっき私が怯えたからか、気を遣ってくれているのが分かる。

精悍な雰囲気イケメンさんは本当に私が天女じゃないのかと訝^{いぶか}しんでいるのがありありと表情に出ていて、思わず笑ってしまう。

「礼を言う——俺はこいつを殺すためにここに来たんだ。楽に、してやろうと……」

「はい、怪我が治って良かったです」

「どうやって……確実に折れていたはず……」

その質問には答えずに、私はにっこり笑って持っていた新しいテトのブラシを渡す。

「私は夕食の準備をしますので、あとは二人でどうぞ。テトもあなたを待っていたようでしたよ」

そう言っただけで踵^{かかと}を返し、家に入ろうとドアに手をかけると、後ろから絞り出すような微かな声が聞こえた。

「良く生きてた。ごめんな」

彼らをそっとしておいて、私は食事の支度にとりかかる。

野菜をザクザクと切ってポトフを作る。テトのために野菜を沢山買ったおかげで色々作れそうだ。

あのお兄さんはいっぱい食べそうだし、また明日買い出しかな？

パントリーに調味料が残っていて良かった。

マヨネーズを作ってパンを薄くスライスし、サンドイッチにする。

それだけだとお兄さんには物足りないかなと思っただけで、干し肉を柔らかくふやかして塩と庭のレモンで味をつけたものを作り、サラダと一緒に盛り付けた。

誰かのために作るご飯は楽しい。一人分を作るよりよっぽどいい。

ずっと忘れていた。料理が私の趣味だったのに。

明日また買い出しに行つて、クッキーも作ろう。テトの野菜ももつと買おう。

その時、トントんと壁を叩く音がした。振り返ると、ドアのないキッチンの入り口からお兄さんが入ってくる。

背が高いので、軽く屈んで入り口のアーチを潜っている。そんな些細な動作も微笑ましい人だ。彼がいるとお部屋が小さく見える。

「改めて礼を言う。テルガードを助けてくれたこと、感謝してもしきれない」

「テルガードというのですね。ふふ、かつこいい名前」

本当の名前と近かったたので、テトは反応してくれたのかもしれない。テトなんて、急に可愛くなっちゃったけど。

「テトという名前を気に入ったようだ。好きに呼んで構わない。俺の名はリヒト・リア・エルダゾルク。天女殿の名前はなんという？」

「天女じゃないですってば。紬です。紬・玲林と申します」

「そうか。紬、何か手伝えることはあるか？ まだここに来たばかりと言っていたな。なんでも言ってくれ」

「テトを捜してお疲れでしょう？ ご飯がちょうどできたので食べませんか。食べ終わったら、お兄さんのお部屋を片付けるので手伝ってください」

お兄さんの目は既に食卓に釘付けになっている。大型犬みたいで可愛い。歳下とは思えない大人の男の人に抱く感想としては失礼かもしれないけれど。

「お口に合えばいいのですが。味付けが少し独特かもしれません……」

こちらの世界の味付けは美味だ。切って焼いて、ドーンみたいな料理がほとんど。エドワード侯爵邸の食事もシンプルなものばかりだった。イジメの一環かと思ったこともあったけれど、ユ

リウス様との食事と同じだったから、そういう料理がスタンダードなのだろう。

「すげえ、美味そう……」

おや、お兄さんこつちが素なのかな？ わりと畏まった物言いをしていたのに。「ふふふ、足りなかったら言ってくださいね」

お兄さんはそれはもうよく食べた。

一口食べて「うつつつまっ!!」と言った後は、もう夢中で食べている。

おかわり用に作っていた塩だれレモンの肉を挟んでマヨネーズで味付けしたサンドイッチも出してあげると、それが一番気に入ったようで、「は？ なんだこれ……」と呟いて完食した。

「食後にお茶を出してあげたかったんですが、まだそこまで用意がなくて……明日、茶葉を買ってきますね。今日は白湯でごめんなさい」

「めつつつつちや美味かった……」

「お兄さん、聞いてます？」

「リヒトだ」

私の言うことを聞いているのかどうか分からないまま、呼び方を訂正される。

この人も家名を持っているし、きっと貴族なんだろう。リヒト様と呼ぶべきなんだろう。崩れていない時の物言いも、上に立つ人のそれだった。

近づきすぎてはいけない。貴族は怖い。

「……………お兄さんのお部屋を片付けてきます」

——貴族も、男の人も、踏みこんではいけない。

この世界に来て学んだのが、この二つ。

お兄さんの胡乱くらんな視線から逃れるようにキッチンを出て、余っていた部屋のドアをあけた。

今朝、一度確認していたそこは、物置き部屋として使っていたらしく、木の空き箱が数点置いてあるだけのがらんとした空間だ。裏の納屋にあったマットレスを持ちこめば、なんとか使えそう。

手早く水拭きしてしまおう。

空箱をどかすただけだから手伝わともないかな、とひょいと木箱を動かしたところで、
見てはいけないものが視界に入った。

「キヤーーーーーー!!」

あ、あ、あ、脚がいつぱい!! 長い脚がいつぱい!

脚がいつぱいついた手のひら大の細長い虫がガサガサと私のほうに!!

「キヤーー!! キヤーー!! キヤーー!!」

「なんだ!? どうした!?」

勢い良く音を立てて部屋に入ってきたお兄さんに抱きつき、ギュッとその軍服を握る。

「あれ! あれっつ! 無理!! やだやだやだ!!」

そちらを見ないようにして床を指差すと、お兄さんの力が抜けたのが分かった。

「なんだ、ビグゴムか。ちょっと待ってろ」

私の頭をポンポンと軽く叩き、ビグゴムというおぞましい名前で呼んだ蜘蛛くもと百足むかを混ぜこんだ
ような虫をヒョイと窓の外に投げた。

「森にはいつぱいいるぞ? 見たことなかったか」

青ざめて返事ができない私を横抱きにして移動し、居間のソファに降ろす。そのまま部屋を出
て行っただと思ったら、さっき私が入れた白湯を持ってきてくれた。

「森……………いつぱい……………いるの……………?」

「お、おう? いるな」

「ど、どうし、どうしよう!? どうしよう!?」

「落ち着け、俺がいる」

「で、でもお兄さんはテトが元気になるまででっ!」

「おいていかない。落ち着け」

「ふえっ……………うえ、うわーーーーーん!!」

「なっ!? そんなにか!」

一気に感情が爆発して、ぼろぼろと涙が止まらない。

子供のようになやみあげ、わんわん泣いてしまつて止められない。

きつと虫のことは引き金になっただけだ。

この世界に来てからずっと気を張って生きてきた。

気を張って、緊張して、大丈夫と自分にいい聞かせて。

不意にお兄さんが私の隣にどかっと座った。また私をひよいと抱き上げて膝に座らせる。彼から香るタバコと石鹼せっけんの匂いが、私をひどく安心させた。



「落ち着いたか？」

「ぐずっ……はい、ごめんなさい」

ようやく涙を止めた私は、お兄さんの膝から降りようとした。けれどガッチリ抱きこまれていて、びくともしない。

「そんなに苦手なのか？」

お兄さんがニヤツと笑う。イケメンが笑うと破壊力が凄い。王子様のようなユリウス様とは違う、切れ長の目をした、精悍な顔。

「それは、そうなんですけど、そうじゃなくて……やっとな安心して暮らせると、思っていたから……」

「やっとな？」

「……」

「俺が新しい部屋を用意する。虫と、他には何が不安なんだ？」

「そこまでしていただくわけには……少し、取り乱しただけです。もう大丈夫です。降ろしてくだ

さい」

それでもお兄さんは離してくれない。紺色の目の中の金の瞳孔が輝いて、私を縫い止める。

「俺の軍馬の命を助けたんだ。褒賞が出るのは当たり前だ。何もなしなどあり得ない」

「褒賞などいりません。テトを助けられたのは、たまたまですし」

「何が欲しい」

人の話を聞かないお兄さんの声は甘い。

本当に何もいらぬのに。

私の欲しいものは、自由と安心だけだ。

そこまで考えて、ふと思いついたことを言ってみる。

「……………では、これを消す方法があれば教えていただけませんか？」

スルスルと包帯をとって手首の内側の痣を見せると、お兄さんは紺色の目を見開いて固まった。

「お兄さん？」

「お前!! 相手は誰だっ!? なんでこんなところに一人にいる! 相手の男は何をしている!!」

何をしていると言われても、浮気しているとしか言いようがない。そんなに怒られるようなこと

なんだろう。浮気されたなんて、情けなくて言いたくはないのに。

「っ——! 怒鳴って、悪い」

私が固まっていると、怯えていると思ったらしいお兄さんが謝ってくれた。

そうじゃないのに。この人は、優しい。

「わた、私は……」

ポツリポツリと、今まであったことを打ち明ける。

いきなり知らない世界に召喚されたこと。

狼の獣人に番だと言われたこと。

聖女と言われたけれど、力は使えないこと。

二人目の番の女性が現れたこと。

自分から逃げ出したけれど、追い出されるのは時間の問題だったこと。

もう平気だと思っていたのに誰かに話すと声が震え、もどかしい。

ワンピースのスカートを握りしめていた私の両手を、お兄さんが上から包みこんでくれた。つかえつつかえ話しているのに、一切遮らず静かに聞いてくれる。

「泣くな、辛い話をさせて、悪かった」

「泣く……？」

指摘されてパチパチと瞬きをすると、パタパタと下に雫が落ちる。

そこで初めて、私は自分が泣いていたことに気が付いた。

「まさか聖女だったとはな……それですか」

お兄さんは何かブツブツと呟いた後、私のほうを向いて言う。

「聖女を蔑ろにするなど、頭沸いてんのか。狼と言ったな。俺が殺してきてやる」

どこまでが本気なのか分からない冗談を言いながら、涙を拭ってくれた。

「私が、力の使えない聖女だから……でも、もう関わりたくないの。だからコレを消す方法を知りたくて……お兄さんは、知ってる？」

「簡単だ。国境を越えればいい。俺が連れていつてやる」

「国境を、越える……？」

「番の認識は国の境で切れる。紬は狼の国ラディアン神から番の祝福を貰ったということだ。一步でも国外へ出てしまえば祝福は消える。匂いは辿れなくなるし、痣も消えるはずだ」

国境を越えるだけ？ そんな簡単なことでいいの？

でも、匂いを辿るって？ ここに居ることはユリウス様にバレてる!?

「匂いを辿るって、今ここに居ることも分かってしまうんですか!?! に、逃げなきゃ!!」

「落ち着け、今はまだ大丈夫だ。ここは訳ありな土地だ。紬の召喚された狼獣人の治める国ラディアンと鳥獣人の治める国リスティアの境で、両国が領地を争っているんだ。膠着状態で権利が宙に浮いた特殊な場所なんだよ。国外判定はされないが、匂いは薄くなっているはず。今はうちの国の預かりということになっている。俺はそれで視察に来ていて、テルガードを失うところだったんだ」

そう言ってお兄さんは私の頭を撫で髪を梳いでくれた。大きなゴツゴツした手が心地よい。不思議とお兄さんに触られるのは嫌じゃない。

「今は、って……？」

「ああ、ここ最近、狼の勢力が強くなってるからな。そろそろ決着がつくだろう。国土として認定

されれば、匂いを辿られる」

今はまだ大丈夫でも、そのうち危なくなる？」

いや、ユリウス様が私を捜すなんてあるのだろうか。厄介者がいなくなり、レイス様と大手を振ってお付き合いできるようになったのだから。

「一生かかっても絶対に匂いを辿れない場所に、俺が連れて行ってやる。安心していい」

「……いえ、よく考えたら、そもそも追われてはいないと思います。私との未来のためと言いがら、二番目の番を優先していたのですから。彼の邸の者からも厄介者として扱われていましたし。ただ、この痣の印はもう見たくなくて……」

もう一度包帯を腕に巻いて痣を隠すと、やっと気持ちが落ち着いてきた。

お兄さんは眉根を寄せて力なく笑う。私を安心させてたくて笑っているのが分かった。

「こないない女を手放すわけないだろ。死にものぐるいで捜しにくる。だが紬は俺が守る、心配ない」

優しいセリフに言葉が返せない。ことごとく自信を削られた私にとって、彼の言葉は面映い。

「褒賞はいりません。でも、痣を消すのを手伝ってくれるのは嬉しいです」

痣を消せるかもしれない。ユリウス様とは関係ないところで自由になれるかもしれない。

そう思うと、安堵でじわじわと涙が出て止まらなくなった。

泣き疲れてお兄さんの膝の上で眠ってしまった私が起きたのは、次の日の昼だった。

気が付くとちゃんと自室のベッドに寝かされていて、玄関がガタガタ鳴る音で目が覚める。

慌てて着替えて出ていくと、キッチンの上のテーブルの上に山盛りの食材が載っていた。その横でお兄さんがクレープのようなものを立ったまま食べている。

「紬の分も買ってきた。けど、紬のみたく美味くねえ」

「ありがとうございます。食材も、こんなに沢山……」

「……別に」

ちよつと照れたらしいお兄さんの食べているクレープもどきをそつと奪いとり昨日作ったマヨネーズと塩だれ肉を追加して戻すと、急にガツガツ食べ始めて面白い。

うんうん、クレープ生地に豆ペーストっぽいものだけじゃあ、お兄さんには味気ないよね。

「お金、払いますね」

「いらん。美味い」

「ふふふ、あ、茶葉も買ってきてくださったんですね！　今、お茶を淹れます！」

「ん、もつと食いたい」

「いっぱい買ってきてくださったので沢山作れます!!」

チーズやバター、生のお肉まであって、テーブルの上は賑やかだ。

さっそく夜用にグラタンを仕込んでいく。バターで玉ねぎをじっくり炒めて、高級そうなベーコンも入れた。

ホワイトソースを焦げないようにゆるゆる作って、ジャガイモとよく分からない野菜を入れる。

お湯が沸いたのでお兄さんに紅茶を淹れてあげると、私をじつと見ながら飲むため、なんだか落ち着かない。

私の分らしいクレープもどきが二つもあったので、買ってきてもらったお肉の端を粗い挽肉にしてパテを作り、レタスとマヨネーズ、トマトソースを挟んでそれも出してあげた。
すぐに切れ長の目が輝いて可愛い。

「……紬の分だ」

片方には手を付けず、お兄さんは私に差し出す。すつごく我慢しながら言っているのがありあり分かって、笑ってしまう。

「ふふ、こんなには食べられないので、助けていただけますか？ 私も半分いただきますね？」

そう言うのと、嬉しそうに受け取ってかぶりつく。

「……!! うつつまつつつ!!」

昨日会ったばかりの人なのに、一緒にいる空間が心地よい。

優しい気遣いをくれるのに、こちらの配慮をまるで必要としない感じが。

「紬はいくつだ？ 子供に見えたり大人の女に見えたりする。目が離せん」

「二十歳です。お兄さんは歳上ですよね？」

「ああ、二十七だ」

もう一つ聞きたいことがあるんだった。この流れで聞いてしまおう。

「お兄さんは……なんの獣人ですか？」

角もないし、犬耳も尻尾もない。

普通に人間に見えるからお仲間だろうか。お仲間だったら嬉しいな。

「——竜人だ」

「竜？」

「俺は黒だから黒竜だな」

「黒竜……」

全然お仲間じゃなかった！ 超ファンタジーお兄さんだった！

「竜ってクレープ食べるんだ……」

どんなリアクションをとったらいいいのか分からなくて意味のないことを呟くと、お兄さんは片眉を上げて怪訝けげんそうな顔をした。イケメンの訝しんだ顔、破壊力凄い。

「人間と同じだ。見た目も同じだろ？」

「飛べたりします？」

「翼を出せばな。大体の奴は翼を出すまでしか獣化できん」

「お兄さんも？」

「さあどうだろうな」

変な答えではぐらかされたところで、お茶のおかわりを注いであげる。

これ以上ファンタジー要素が増えてもお腹なかいっぱいなので、ここで引き下がる。

「駄犬ごときに負けはしないから安心していい」

「駄犬？」

「クソ犬」

「？」

「狼の野郎だよ」

ユリウス様に駄犬という言葉が似合わなすぎて全くピンと来なかった！ ユリウス様はキラキラ王子みたいな見た目ののに、駄犬って……

「昨日も言いましたけど、追ってこないと思いますよ」

「昨日も言ったが絶対追ってくる。死にものぐるいでな。紬はそういう女だ」

「お兄さんというと、たまにすごく泣きそうになります」

「紬の泣いた顔は綺麗だからまた見たい」

「ええ……？」

戸惑った私を見てニヤツと悪い顔で笑ったお兄さんは、こちらへ来てふわっと私を抱き上げた。

「!? な、何!?」

そのままソファーにどしっと座り、膝の上の私を抱きしめる。

「お兄さん？」

「リヒトだ」

「……………」

「紬が臆病なのはクソ犬のせいかな。来たらぶっ殺してやる」

「そんな、ことは……」

そうなんだろうか。ユリウス様のせいと考えたことはなかったけれど。

「こっち向け。紬が他の男のことを考えるだけで腹が立つ。こんなの初めてでイライラする」

「昨日会ったばかりじゃないですか」

「関係ない。俺のものになれ」

「それは……」

「駄犬が。なんてことしてくれやがる。いや、手放してくれたことに感謝か？ 腹立つな」

「ふふ、あははは！」

お兄さんがあまりにも真剣に変なことを言うので、つい噴き出してしまふ。

「泣き顔も綺麗だが、笑った顔のほうがいい。我慢が利かなくなるが」

「お兄さんは女性を喜ばせるのがお上手ですね」

「……………」そう来たか。こんなの初めてだって言っただろ。本気になった女はお前だけだ」

この世界の男の人はリップサービスが上手いなあ。

それでも、お兄さんの腕の中は安心する。うつすら香る、タバコと石鹸の匂い。

ガンツッ！ ガンツッ！

その時、ガラスに何かを打ち付ける音がした。

驚いてそちらを見ると、テトが窓のすぐ外に興奮した様子で立っている。

「テト！ どうしたの!? お腹すいた!?」